

個性論ノート(6) : エーリッヒ・フロムにおける個性把握の二つの方法

SANUKI, Hiroshi / 佐貫, 浩

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

361

(終了ページ / End Page)

385

(発行年 / Year)

2010-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007368>

〈研究ノート〉

個性論ノート（6）

——エーリッヒ・フロムにおける個性把握の二つの方法——

法政大学キャリアデザイン学部教授 佐貫 浩

ふたたび、エーリッヒ・フロムに立ち戻って、彼の個性把握の方法を改めて分析してみよう。彼には、二つの異なった視点からの個性分析があると把握することができる。その一つは、すでにいままでみてきたような存在と所有という視点からの個性分析である、もう一つは、その著書『自由からの逃走』で展開されている視点である。今回は、まず、『自由からの逃走』を個性論の視点から読み解くことを試みたい。

その分脈での「個性」把握には、現代の個性問題をとらえる重要な枠組みがあると思われる。すなわち、近代的自由の訪れとともに、はじめて個性の実現が一般のひとびとの普遍的で共通の課題として自覚されたこと、個性化はそれまでの古い「第一次的絆」による社会的統合からの自由化（解放）の過程であること、しかしそれは「孤独」の恐怖と無力感に襲われる過程であり、それゆえにその「自由からの逃走」「逃避のメカニズム」を生みだし「個性」を放棄する衝動や行動様式を生みだしうること、しかし真の「自主性」を貫くならば、第二次的な社会的絆に依拠してあらたな共同の関係性を獲得し、真の個性化の道をあゆむことができることをとらえることができるだろう。この検討は、近代社会の到来とともに課題となった個性概念の歴史的な性格を把握するうえでも有効な検討となるだろう。

（以下、断りのない限り、本からの引用の頁数は『自由からの逃走新版』東京創元社、1984年、のものである。）

(一)「個性化」の過程と「自由からの逃走」

(1) 弁証法的性格を持った個性化の過程

フロムは、ひとびとを結びつける「第一次的絆」が断ちきられることで、人類は、はじめて本格的な自由にむかうと把握する。それは歴史的には、近代市民社会の登場を画期とする。その「自由と独立」への過程は、しかし矛盾に満ちたものであり、そのなかで進行する「個性化の過程」には、二つの側面をもった「弁証法的な性質」(38頁)があると指摘する。

第一の側面は、「意志と理性によって導かれる一つの組織された構造が発達」し、「この組織され総合されたパースナリティ全体を自我と呼ぶならば、個性化の推し進められていく過程は、一面、自我の力の成長ということもできる」(38頁)とする。しかしもう一つの側面は、「孤独が増大していくこと」(39頁)である。フロムのいうところをみよう。

「個性化の過程の他の面は、孤独が増大していくことである。第一次的絆は安定感をもたらし、外界との根本的な統一を与えてくれる。子どもはその外界から抜け出すにつれて、自分が孤独であること、すべての他人から引き離された存在であることを自覚するようになる。この外界からの分離は、無力と不安の感情を生み出す。外界は個人的存在と比較すれば、圧倒的に強力であって、往々にして脅威と危険にみちたものである。人間は外界の一構成部分であるかぎり、個人の行動の可能性や責任を知らなくても、外界を恐れる必要はない。人間は個人となると、独りで、外界のすべての恐ろしい圧倒的な面に抵抗するのである。／ここに個性をなげすめて外界に完全に没入し、孤独と無力の感情を克服しようとする衝動が生まれる。…(略)…／しかし服従が孤独と不安を回避するただ一つの方法ではない。もう一つ、解きたい矛盾を避ける唯一の生産的な方法がある。すなわち人間や自然に対する自発的な関係である。それは個性を放棄することなしに、個人を世界に結びつける関係である。この種の関係——そのもっともはっきりした現れは、愛情と生産的な仕事である——は全人格の統一と力強さにもとづいている。それゆえそれは自我がどこまで成長する

かの限界によって左右されるだけである。」（39－40頁、傍点原文）

フロムは、ここで「個性化」という概念と「個性」という概念とを区別して使用している。個性化の過程は、いち個性が実現していく過程としてではなく、むしろ「第一次的絆」から分離され解放され、その意味で不安に満ちた「自由」への道を歩みだしていく過程をあらわしている。そしてこの過程は、「孤独が増大していく」過程であり、その孤独にたえられなくなって「個性」を放棄してしまう危険性をもっており、またそれをこえて新たなつながり（「第2次的絆」）を獲得していく過程でもあり、「弁証法的な性質」をもっていると把握している。「個性化」がこの弁証法的な性格をもった過程をとおして、彼のいう「生産的な方法」、「自然や人間に対する自発的な関係」と結びつけられたときに、個性化の過程は「個性」の実現へとたどりつくことができるとするのである。

この「個性化」の過程についてフロムはつぎのようにものべる。

「個別化した人間を世界に結びつけるのに、ただ一つ有効な解決方法がある。すなわちすべての人間との積極的な連帯と、愛情や仕事という自発的な行為である。それらは第一次的絆とはちがって、人間を自由な独立した個人として、再び世界に結びつける。しかし個性化の過程を推し進めていく経済的、社会的、政治的条件が、いま述べたような意味での個性の実現を妨げるならば、一方ではひとびとにかつて安定を与えてくれた絆はすでに失われているから、このズレは自由を絶えがたい重荷にかえる。そうになると、自由は疑惑そのものとなり、意味と方向とを失った生活となる。こうして、たとえ自由を失っても、このような自由から逃れ、不安から救い出してくれるような人間や外界に服従し、それらと関係を結ぼうとする、強力な傾向が生まれてくる。」（46頁）

このなかで触れられている「ズレ」について、フロムは、『『……からの自由』と『……への自由』とのズレ」、「どのような絆からも自由であるということと、自由や個性を積極的に実現する可能性を持っていないということとのズレ」

レ」(46頁) とものべている。

『自由からの逃走』は、この孤独にたえられずに自由を放棄し、個性を放棄していく過程をプロテスタンティズムの展開やドイツファシズムの社会心理学的分析によって明らかにしたものである。したがって、この著書は、同時に矛盾的な「弁証法的な性質」をもった「個性化の過程」と「個性」とはなにかをとらえた著書として読みとくことができるだろう。

(2) 「第一次的な絆」から「第二次的な絆」へ

フロムは、「第一次的な絆」を、人間存在の意味を与えるシステムとして把握した。「第一次的な絆」の社会であった中世社会は、たしかに「個人的自由の欠落」のもとではあるが、「ひととはだれでも社会的秩序のなかで自分の役割にかながれていた」(52頁)。その様相を次のように描いている。

「しかし近代的な意味での自由はなかったが、中世の人間は孤独ではなく、孤立していなかった。生まれたときからすでに明確な固定した地位をもち、人間は全体の構造の中に根を下ろしていた。こうして人生の意味は疑う余地のない、また疑う必要もないものであった。人間はその社会的役割と一致していた。かれは百姓であり、職人であり、騎士であって、偶然そのような職業を持つことになった個人とは考えられなかった。社会的秩序は自然的秩序と考えられ、社会的秩序の中ではっきりした役割を果たせば、安定感と帰属感があたえられた。そこには競争はほとんど見られなかった。」(53頁、傍点原文)

しかし資本主義は、個人をそういう「第一次的な絆」から解放した。その結果、ひとびとは、「束縛からの自由」を手にいれたが、その代償として「安定感と帰属感」を喪失し、「人生の意味」をめぐる不安に襲われ、孤立の恐怖にさらされることになった。重複するがその様相をフロムはつぎのように描いている。

「……かつての安定感と帰属感とを与えていた絆から解放される。人間が

世界の中心であるような、狭いとぎされた生活は終わりをつげる。世界は際限のないものとなり、同時に恐怖にみちたものとなる。人間はとぎされた世界のなかでもっていた固定した地位を失い、自己の生活の意味に答えるすべをなくしてしまう。その結果、自分自身についての、また生活の目標についての疑惑がふりかかってくる。かれは強力な超人間的な、資本や市場の力に脅かされる。仲間に対する関係も、すべて心の奥底には競争心が巣くっていて、敵意にみちた空々しいものとなった。かれは自由になった——言い換えれば孤独で孤立しており、周囲からおびやかされているのである。ルネッサンス時代の資本家ももっていたような富も力もなく、また他人や世界と一体になっていた感じもうしない、かれは自己の無力さと頼りなさにおしひしがれる。天国は永遠に失われ、個人は独りで世界に立ち向かう。——かれは果てしない恐怖に満ちた世界に放りだされた異国人である。新しい自由は必然的に、動揺、無力、懷疑、孤独、不安の感情を生み出す。」(72頁)

その結果、「……からの自由」に絶えられず「自由から逃れようとする」ための逃避が生まれる。そのような「現代における逃避の主要な社会的通路はファシスト国家に起こったような指導者への隷属であり、またわれわれ民主主義国家に広くいきわたっている強制的な画一化」(151頁)であるとする。

ここで注意しておく必要があるのは、フロムは、確かにドイツナチズムを、そのような「逃避」の典型として分析したが、『自由からの逃走』は、そこに止まらず、基本的に資本主義そのものにとって不可避であることとしており、したがって彼の分析対象となるメカニズムは、「一方ではファシズム体制であり、他方では近代デモクラシー」(159頁)となる。そのことは、ドイツナチズムのような極端な形ではないにせよ、資本主義の高度に展開した今日なお、いやある意味で社会排除のシステムがかつてなく強力に働きはじめている現代の日本社会において、このような「逃避」のメカニズムが働きつつあるのではないかと考えてみる必要があるのではないか。そして今日引きおこされている「個性」をめぐる矛盾の事態は、まさにその現れとしてとらえられるのではないかということである。

(3) 「逃避」のメカニズムとそこで形成される人格特性

ではそのような事態は個人のありかた、人格のありようにいかなる性格を強制すると考えられるのだろうか。フロムのいうところをみておこう。

「個人に安定感を与えていた第一次的な絆がひとたび断ち切られるやいなや、そして個人が彼の外に完全に分離した全体としての世界と直面するやいなや、無力感と孤独感との絶えがたい状態に打ち勝つために、2つの道がひらかれる。一つの道によって、かれは『積極的自由』へと進むことができる。かれは愛情と仕事において、彼の感情的・感覚的及び知的な能力の純粋な表現において、自発的にかれを世界と結びつけることができる。こうしてかれは、独立と個人的自我との統一を捨てることなしに、再び人間と自然と彼自身と、一つになることができる。彼のためにひらかれているもう一つの道は、かれを後退させ、自由をすてさせる。そして個人的自我と世界との間に生じた分裂を消滅させることによって、彼の孤独感にうちかとうと努力する。」(158頁)

この後者の道(逃避のメカニズム)については、多様にのべられているが、それを、個の人格のありようという点に注目していくと、つぎのような記述が、くりかえされている。

◇「マゾヒズム的な努力としてもっともしばしばあらわれる形は、劣等感、無力感、個人の無意味さの感情である。…(略)…彼らは自分自身を小さくしようとしている。弱くしようとしている。そして事物を支配しないようにしている。たいていの場合、彼らは外がわの力に、他のひとびとに、制度に、あるいは自然に、はっきりよりかかろうとしている。かれらは自分を肯定しようとせず、したいことをしようとしない。しかし外がわの力の、現実的な、あるいは確実と考えられる秩序に服従しようとする。かれらは『私は欲する』とか『私は存在する』とかいう感情を持つことが不可能であることが良くある。生活は全体として、支配も統制もできない、圧倒的に強力なもののかとして感じられる。」(160頁)

◇「個人的自我を絶滅させ、たえがたい孤独感にうちかとうとする試みは、マゾヒズム的努力の一面に過ぎない。もう一つの面は、自己の外部の、いっそう大きな、いっそう力強い全体の部分となり、それに没入し、参加しようとする試みである。その力は個人でも、制度でも、神でも、国家でも、良心でも、あるいは肉体的強制でも、なんでもよい。ゆるぎなく強力で、永遠的で、魅惑的であるように感じられる力の部分となることによって、ひとはその力と栄光にあやかりとうとする。ひとは自己自身を屈服させ、そのもつすべての力や誇りを投げすて、個人としての統一性を失い、自由をうちすてる。しかしかれは、彼が没入した力に参加することによって、新しい安全と新しい誇りとを獲得する。またかれは疑惑という責害に抵抗する安全性も獲得する。マゾヒズムの人間は、外部的権威であろうと、内面化された良心あるいは心理的強制であろうともかくそれらを主人とすることによって、決断するということから解放される。すなわち自分の運命に最後の責任をもつということから、どのような決定をなすべきかという疑惑から解放される。…（略）…かれの生活の意味やかれの自我の同一性は、自身が屈服したより大きな全体によって決定されるのである。」（174頁）

◇「この特殊なメカニズム（「機械的画一性」のことを指す―注）は、現代社会において、大部分の正常なひとびとのとっている解決方法である。簡単にいえば、個人が自分自身であることをやめるのである。すなわち、かれは文化的な鑄型によってあたえられるパースナリティを、完全に受けいれる。そして他のすべてのひとびととまったく同じような、また他のひとびとがかれに期待するような状態になりきってしまう。『私』と外界との矛盾は消失し、それと同時に、孤独や無力を恐れる意識も消える。……個人的な自己をすてて自動人形となり、周囲の何百万というほかの自動人形と同一となった人間は、もはや孤独や不安を感じる必要はない。しかし、かれの払う代償は高価である。すなわち自己の喪失である。」（203頁）

◇「思考や感情や意志について、本来の自己がにせの自己に代置されることは、遂には本来の自己がにせの自己に代置されるところまで進んでいく。本来の自己とは、精神的な諸活動の創造者である自己である。にせの

368 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

自己は、実際には他人から期待されている役割を代表し、自己の名のもとにそれをおこなう代理人にすぎない。」(224頁)

これらの記述をとおして指摘されていることは、「自由からの逃走」は、自由を生きることと直面しなければならない孤独や不安からのがれようとして、強力な権威や、社会的常識やにしたがうことで、自己を放棄すること、自分の意志と判断を放棄することに至るということである。そのことを個性化の矛盾的な過程としてとらえるならば、逆に、個性の実現とは、自分の意志と判断によって生きること、自分を肯定し、自分自身を生きることをとおして他者との、世界との再統合を実現すること、自分自身を生きる行為をかいして「第二次的絆」を作りあげること、そして自分の生きる意味を明らかにすることであるということができる。

(4) 個性と自発性

フロムは、「自由からの逃走」に対して、「個人が独立した自我として存在しながら、しかも孤独ではなく、世界や他人や自然と結び合っているような、積極的な自由の状態」(283頁)を対置する。そしてその状態を「自発性」というキー概念によって解明しようとしている。

◇「自発的な活動は、人間が自我の統一を犠牲にすることなしに、孤独の恐怖を克服する一つの道である。というのは、ひとは自我の自発的な実現において、かれ自身を新しく外界に——人間、自然、自分自身に——結びつけるから。愛はこのような自発性を構成するもっとも大切なものである。しかしその愛とは、自我を相手のうちに解消するものでもなく、相手を所有してしまうことでもなく、相手を自発的に肯定し、個人的自我の確保のうえに立って、個人を他者と結びつけるような愛である。…(略)…仕事もいま一つの構成要素である。しかしその仕事とは、孤独を逃れるための脅迫的な活動としての仕事ではなく、また自然との関係において、一方では自然の支配であり、一方では人間の手で作られたものにたいする崇拜や隷属であったりするような仕事でもなく、創造的行為において人間

が自然と一つになるような、創造としての仕事である。」(287頁)

◇「われわれのものと、ひとであれ無生物であれ、われわれが創造的な活動によって純粋な関係をもっているものだけである。われわれの自発的な活動から生まれるこれらの性質のみが、自我に強さをあたえ、ひいては自我の統一性の基礎となる。…(略)…自分自身でないことほど恥ずべきことはなく、自分自身でものを考え、感じ、話すことほど、誇りと幸福をあたえるものはない。」(288頁)

◇「もし個人が自発的な活動によって自我を実現し、自分自身を外界に関係づけるならば、かれは孤立した原子ではなくなる。すなわち、かれと外界とは構成された一つの全体の部分となる。かれは正当な地位を獲得しそれによって自分自身や人生の意味についての疑いが消滅する。この疑いは分離と生の妨害から生まれたものであるが、脅迫的にでもなく自動的にでもなく、自発的に生きることができるとき、この疑いは消滅する。かれは自分自身を活動的創造的な個人と感じ、人生の意味がただ一つあること、それは生きる行為そのものであることをみとめる。」(289頁、傍点原文)

フロムは、この『自由からの逃走』全体を通して、「逃避」のメカニズムが、自己を断念させ、強い権威に従属させ、かれを外界に脅迫的に一体化させることで、「孤独」と「分離」の危機を避けようとするものであることを力説してきた。その結果として、自分というもの、自分の意志、自分の感覚、自分の思考に依拠して生きることが放棄され、他者の意志で生きること、従属して生きること、機械的な画一性に自己を任せる病理が生まれることを指摘した。個性の回復と実現は、したがって、ほんとうの自己に依拠して生きること、ほんとうの自己の意志の発動としての「自発性」に依拠して生きることのなかにあるととらえるのである。フロムは、「パーソナリティの個人的基盤」についてつぎのようにいう。

「自我の実現としての積極的な自由は、個人の独自性を十分に肯定する。人間は生まれるときは平等であるが、しかしまたことなってもいる。この差異の根拠は人生に出発するときにもっている生理的精神的な生まれつき

370 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

の素質であり、さらに彼らが遭遇する特殊な環境や経験の状況がつけ加わる。パースナリティのこの個人的基盤は、二つの有機体が肉体的にけっして同一でないのと同じく、他のどんなひととも一致しない。自我の純粹な成長は、常にこの特殊な基盤のうえの成長である。それは一つの有機的な成長であり、この一人の人間にそしてかれだけに固有の一つの中核の展開である。」(290頁)

フロムは、自発性が固有性につながることをここで指摘している。自発的な活動が蓄積されるとき、そのそれぞれの個人に「固有の中核」は、「パースナリティの個人的基盤」のうえで、固有の展開をする。フロムは「独創的とは、くりかえしていえば、ある考えが以前だれか他人によって考えられなかったということではなく、それがその個人のなかではじまっているということ、すなわちその考えが自分自身の活動の結果であり、その意味で彼の思想であるということの意味する」(268頁)ということを強調している。すなわち独創的であるかどうかは、その結果が他者のそれと差異があるかどうかではなく、この「固有の中核」が世界との自発的な交渉を開始しているかどうか、その個人が、自分の意志で、「パースナリティの個人的基盤」のうえで、ほかの誰によっても担われえない、他者との、世界との、固有の主體的な交渉を開始しているか、そしてそのなかでかれ自身が固有の自分を作りだす自発的な主体になっているかどうか、ということなのである。

(5) フロムの「個性」概念について

以上の検討を踏まえて、あらためて、『自由からの逃走』において展開され、あるいは示唆されている個性概念について整理しておきたい。

第一に、フロムは、個性問題を、近代における資本主義の展開によるひとびとの「第一次的絆」からの解放によって生みだされた、「第二次的絆」へ向かう矛盾的で「弁証法的な性質」をもった「個性化の過程」の問題として論じた。したがって、フロムの個性論は、人間存在の固有性と共同性という二つの視点を資本主義社会の展開のなかで（あるいは資本主義自体をこえる社会構想のなかで）、どのようにして再統合しうるかという社会科学の基本問題にそくした

テーマとして設定されているとみることができる。そういう意味では、また人間の共同的本質（マルクス）の回復という社会科学と哲学の根本問題と通底する理論枠組みをもつものとして、フロムの個性論をとらえることができる。

第二に、「個性化」は、「……からの自由」と「……への自由」の交錯する過程であり、「……への自由」の条件が整わないなかでは、「自由からの逃走」を引きおこし、そこには「……からの自由」によってもたらされる孤立と不安からののがれるための各種の心理的メカニズムが働き、そのなかで、自分の意志や判断を放棄して、強力な権威への依存や「機械的画一性」への逃避がおこる。それは個性の放棄ともいうべき事態として把握される。『自由からの逃走』は、そういう個性放棄がいかなるメカニズムでおこるのかを、ファシズムにたいする抵抗というリアリティのなかで、鮮やかに描きだしたものととらえることができる。『自由からの逃走』はこのような個性化過程における個性放棄という事態を徹底して分析することのなかから個性の本質を浮かびあがらせている分析であるととらえることができる。

第三に、それに対して、「……からの自由」によって展開しはじめる「個性化の過程」を「……への自由」へと進め、個人の徹底した主体性と自発性にもとづく活動による他者、世界との再統合、それによる「第二次的絆」の形成にいたる道があり、そのような仕方ですなわち、「自分自身を外界に関係づけるならば、かれは孤立した原子ではなくなる。すなわち、かれと外界とは構成された一つの全体の部分となる」ことができる。それによってかれは、生きる固有の意味をもった存在として自己を実現できる。そこに個性の実現の姿をみることができる。この論理によって、フロムは、「……への自由」の過程と個性の実現の過程が一体のものであることを示している。個性化の過程へと放りだされた個人が、古い依存へと逃避するのではなく、まさにその固有の存在であるという地点に立って、自主的に思考し、行為し、あらたな関係を創造し、自己の世界における存在の意味と位地を実現すること、それを自由を生きぬくことによって達成すること、そこに個性の実現をみるのである。

第四に、従って個性とは、他者との差異を意味するものではなく、その存在が、世界との関係づけ、世界との再統合において、真に自発的で主体的であること、「パーソナリティの個人的基盤」に依拠して真に自発的な、従って固有

372 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

の仕方では外界に——人間、自然、自分自身に——結びつくことによって実現される個の存在の固有性として捉えることができる。この点に関しては、この本のなかでもいくつか触れていることであるが、個性と平等との関係、個性と差異との関係などについても原則的な視点を提起している。真の「創造性」とは、その結果——結果の差異——ではなく、主体的自発的な行為によって世界との新たな結びつきを探索し、「パーソナリティの個人的基盤」に即して、すなわち固有の方法で、自己の主体性を展開することであるという強調は、個性を他者との差異として捉えることを批判し、自発性にこそ真の個性を実現する道が存することを明確に提起しているのである。

第五に補足すれば、しかしそのような個性の実現状態は、下記の文章にあるように、固定的なものではなく、「ダイナミックな」ものである。すなわち、個性とは、たえず主体的な行為によって、主体的で自発的な自己を創造し続けるなかで、外界との統合をたえず更新していく連続的行為によって、実現され維持されていくものなのである。それは、個性を所有するもの (have) の差異として固定的に把握することではなく、存在 (be) のありようとしてダイナミックに把握するもう一つのフロムの個性把握の方法とも共通する視点である。

「もしかれが自発的な営みにおいて、自然に対してそれを包含するような関係を保つならば、かれは個人として、強さを獲得し安定を得る。… (略) …新しい安定は個人が外部のより高い力から与えられるような保護にもとづいていてのではない。またそれは生の悲劇的な性質が排除されるような安定ではない。新しい安定はダイナミックである。それは保護ではなく、人間の自発的な活動によって瞬間ごとに獲得される安定である。それは自由だけが与えることができ、… (略) …」(290頁)

第六に、これもまた補足としてのべておくならば、『自由からの逃走』は、その社会心理学的な分析に中心課題がおかれているために、ここでの個性概念も、社会心理学的なバイアスがかかっているとみななければならない。それは、個性が、その自発性という焦点において——したがって個性の放棄は自己放棄

の心理的メカニズムによって——解明されているという点である。かれはこの自発性が実現されるその活動の具体的性格については「愛と仕事」という抽象的な提起をすることに止まっている。仕事については、「創造的行為において人間が自然と一つになるような、創造としての仕事」とのべるに止まっている。しかしフロム自身がべつのところで展開しているような存在と所有に関する展開のなかでは、まさに資本主義的所有それ自体を個性のありようにたいする社会的規定性（個性の実現を妨げる規定性）として深く分析しているように、そういう視角もあわせてフロムの個性概念を取りだす必要がある（この視点については、「個性論ノート（2）」を参照）。

（二）再び<have>と<be>の論理について

（1）存在と所有という分析視角

フロムのもう一つの個性把握の方法は、存在（be）と所有（have）という分析視角によるものである。フロムは、人間のありように関して、<be=存在>と<have=所有>という様式の違いを論じ、本来の様式としての<be>が<have>の様式に置きかえられることに、資本主義制度の基本的特質と矛盾をとらえようとした。フロムは、人間存在の意味は、あること（be=存在）にこそ依拠していると考えた。そしてその存在を直接に実現するものとして所有（have）するもの（能力や性格や生きるための道具や一定の富など）が機能しているとき、その所有物の価値は、存在の側から意味づけられているととらえた。（「個性論ノート（2）」（『法政大学キャリアデザイン学会紀要 vol 3、2005年度版、参照）

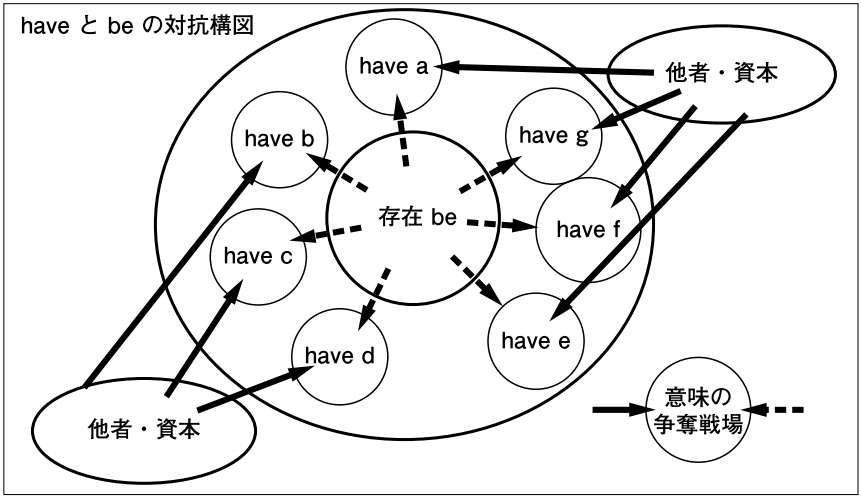
資本主義的な生産のシステムの上では、労働者は、労働力商品市場で、各種の能力や特性を持った（have）人間として登場し、資本はその労働者の個人としての存在（be）それ自体に意味を見いだすのではなく、したがってまた興味があるのではなく、その所有物を資本にとっての使用価値として評価し、買い求める。だから労働者は、「売り」になる知識や技術やスキルの獲得を目指す。それは、自分にとって直接に意味がある所有物だからではなく、自己の商品としての価値を高めるためのアイテムだからである。このような人間の所

374 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

有する能力を<have>の様式において評価するシステムは、その能力の所有者に対しては、その能力の価値を絶えず間接化し、結局は他者の評価を介してのみ自分の能力、もろもろの所有物の価値を意味づけることができるという間接的自己評価の回路を生み出す。偏差値によって自らの能力や学力をはじめて意味あるものとして捉えられるという今日の学力評価システムは、そのような労働力商品としての人間の労働力市場における評価様式の反映である。

そして本田由紀の指摘するようなハイパーメリトクラシーの時代においては、客観的な諸能力に止まらず、自分の性格やコミュニケーション力、あるいは表情や他人に与える好感度などまでもが所有物として評価され、労働者はそういう感情や意欲や好感度すらをも「所有」していることを、態度を演じることで証明して見せなければならなくなる。

次の構図は、本来人間の存在に不可分に結びつけられ、その存在を実現するために働くべき多くの所有物、達成物が、企業や他者からの評価（実線の矢印）によって強力に意味づけられ、存在<be>の側からの意味づけ（点線の矢印）が弱まり、自分の所有物<have>の価値の間接化、さらに自己自身の価値の間接化ともいうべき事態が進行するメカニズムを、その両方からの意味づけの作用が対抗している様子として示した構図である。



（2）「持つ様式」と「ある様式」の性格

改めて、この構図において、個性とはどのように把握されるのかを述べておこう。今回のこの構図に即して明確になることは、<be>の様式と<have>の様式との対抗は、その内部の構造に注目するとき、その持つということ<have>のあり方自体の相違として捉えられるということである。

個性を所有物<have>の差異として捉える仕方は、先に触れた労働力市場における人間評価の様式にそったものである。そこでは、所有物は、自分の自己実現という視点からではなく、自分を労働力商品として買ってくれる他者（資本）の側から、その所有物が魅力あるものとして捉えられるとき、価値を持つものとなる。したがってまた、当然市場の需要と供給の法則からして、希少価値のある所有物ほどその価値が高く評価されることになる。ここで言われる個性とは、どれだけその所有物に希少価値があるかを表す概念に他ならない。本来個性とは、その個人の人間としての存在の固有性を表すはずであるが、ここでは、その存在に関する概念ではなく、その存在<be>が、どういうものを所有しているのか、どれだけ希少価値となる所有物をもっているのかを表す概念へとすり替えられて使われているのである。したがってこの様式においては、所有物の価値は、自分自身の自己実現を支える上での価値として計られるものではなくなっている。

先にも述べてきたように、受験学力が、結局、他者（資本）にとって必要な学力を所有しているかどうかという視点から獲得されるということは、自分自身の自己実現のための学力としてその学力が求められる契機を縮小させる。高い評価を獲得すること自体が自己目的と化した状況のなかで、すなわち学力偏差値競争という場で、学習の意味づけがおこなわれるために、他者の評価を介してはじめて自分の獲得するものの意味が明らかになるという様式、すなわちまさに持つ<have>様式において、知識が獲得されるようになる。

フロムは、存在と所有、「あること」と「持つこと」という概念の性格をより明確にするために、持つ様式における「持つこと」の意味を、「性格学的」（123頁）なものとしている（以下の引用の頁数は、断わりのない限り、エーリッヒ・フロム『生きるということ』紀伊國屋書店、1977年、による）。ここでいう「性格学的」という概念は、「私有財産の性質に由来」（112頁）する所

376 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

有の本質において「持つ」ということを規定することを意味している。それについては、フロムは次のように規定している。

「究極的には、『私（主体）はO（客体）を持つ』という論述は、私がOを所有することによって私を定義することを表す。主体は私自身ではなく、私は私が持つものである。私の財産が私自身と私の同一性を構成している。『私は私である』という論述の底にある考え方は、『私はXを持つが故に私である』である——Xは、私が関係するすべての自然界の物や人物に等しく、その関係は私がそれらを支配し、永続的に私の物とすることによって結ばれる。／持つ様式においては、私と私の持つものとの間に生きた関係はない。それも私も物となり、私はそれを持つ。なぜなら私はそれを私の物とする力を持っているからである。しかしまた逆の関係もある。すなわちそれが私を持つのである。というのは私の同一性言い換えれば正気感覚は私がそれ（そして可能なかぎり多くのもの）を持つことにかかっているからである。持つ存在様式は、主体と客体との間の生きた、生産的な過程によって確立されるのではない。それは客体と主体との双方を物にする。その関係は死んだ関係であり、生きた関係ではない。」（113頁、傍点原文）

フロムは、彼のいう「生産的な過程」について、より積極的に「生産的能動性」という概念を提起している。

「疎外されない能動性においては、私は能動性の主体としての私自身を経験する。疎外されない能動性は、何かを生み出す過程であり、何かを生産してその生産物との結びつきを保つ過程である。このことはまた、私の能動性は私の力の現れであって、私と能動性と能動性の結果とは一体であるという意味も含んでいる。私はこの疎外されない能動性を、生産的能動性と呼ぶ。」（130頁、傍点原文）

ここからは、「ある様式」とは、人間が、主体として、自らを生産的な状態

におくことであり、それは『自由からの逃走』において展開した——そしてこの「個性論ノート（6）」でいままで検討してきた——「自発性」が実現されている状態、「自発的能動性」の状態のことであるということが出来る。そのことは、この『生きるということ』の中で、『自由からの逃走』の中で＜自発的能動性＞という用語を使用し、それ以降は＜生産的能動性＞という用語を使用した」（130頁）と明記していることから明瞭である。

なお、補足しておくが、ここでフロムが使用する「持つ様式」の意味をより明確にするために、「存在的な持つこと」という領域があることを指摘している。通常生きるために消費する、そしてそのために所有するものは、フロムのいう「性格学的」な意味における持つこと＜持つ様式＞とは異り、「存在的に持つこと」という独自の質を持っており、それは＜ある様式＞と共存しているとしている。それは次のように述べられている。

「私たちがここで問題にしている持つ様式を十全に理解するためには、さらに別な限定、すなわち存在的な持つことの機能という限定を加えることが必要であるように思われる。というのは、人間存在は私たちが生きていくために或る種の物を持ち、守り、手入れをし、使うことを要求するからである。このことが当てはまるのは肉体であり、食物、住居、衣服であり、必要品を作り出すのに必要な道具類である。この形の持つことは人間存在に根ざしているの、存在的な持つことと呼んでもいいだろう。／…

（略）…／存在的に持つことはあることと衝突はしない。性格学的な持つことは、必然的に衝突する。…（略）…ところがふつうの人は、存在のおよび性格学的な意味において持つことを欲する。」（123頁）

（3）学習することにおける様式の違い

では、存在＜be＞の様式においては、所有物は、どのような形をとるのだろうか。「学習すること」に関してフロムは、「持つ様式」と「ある様式」の違いをつぎのようにのべている。

◇「持つ存在様式の学生は、講義に耳を傾け、講義の言葉を聞き、それら

378 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

の言葉の論理構造と意味とを理解し、できるかぎり、すべての言葉を彼らのルーズリーフ式のノートに書き込む——後になって、筆記したものを暗記して試験に合格できるように。しかしその内容が彼ら自身の個々の思想体系の一部となって、それを豊かにし、広げることにはならない。学生はその代わりに、彼らが聞く言葉を思想あるいは全体的な理論の固定した幾つかの集合に変貌させ、それをたくわえる。」(32頁)

◇学習の過程は、世界に対してある様式で結びついている学生にとっては、まったく異なった特質をもっている。まず第一に、彼らは一連の講義に、たとえそれが第一回の講義であっても、白紙(タブラ・ラーサ)の状態で開催することはない。彼らはその講義が扱うはずの諸問題についてあらかじめ思いをめぐらしている、彼らの頭には、彼らなりの或る種の疑問や問題がある。彼らはその題目について十分に考えたので、それに関心をいだいている。言葉や観念の受動的な入れものとなることはなく、彼らは耳を傾け、彼らは聞く。そしてこれが最も重要なことだが、能動的、生産的な方法で、彼らは受け入れ、彼らは反応する。彼らが耳を傾けるのは、一つの生きた過程である。彼らは関心をいだいて、耳を傾け、講師のことを聞き、聞くことに反応して自発的に生命を得る。彼らはただ家へ持ち帰って記憶することができる知識を獲得するのではない。それぞれの学生が動かされ、変化したのだ。講義を聞いたあとで、それぞれが聞く前の彼もしくは彼女と異なった人間となったのだ。」(53頁)

ここには、「持つ様式」と「ある様式」の違いが明確に示されている。重要なことは、「持つ様式」においては、その知識の所有が、その所有者個人の変容と結びついておらず、どんなものを所有したかが、すなわち所有したものそのものが、他者からの評価によって、その個人の価値として評価されるということである。それに対して、「ある様式」においては、その知識の獲得が、その存在を能動化し、その個人の存在のありようの変革、あるいは新しい存在の創出として作用している。すなわち「ある様式」それ自体の発展として機能しているのである。

もちろん、そのような「ある様式」における「知識の獲得」を、それもまた

知識の所有<have>と捉えても間違いというわけではない。しかし「所有」という概念を、フロムがこの本全体で使用しているような意味——資本主義的所有という意味——で理解するならば、やはりそれは間違いというべきだろう。それは「獲得」というべきであろう。この場合、「所有」とは、あるものをそのままで所有することであり、「獲得」とは、あるものを獲得して自分自身の新しい創出に至ることを意味する。その意味で次のフロムの文章を理解する必要がある。

「知ることの領域における持つ様式とある様式との間の違いは、次の二つの定式で表現される。『私は知識を持っている』と、『私は知っている』と。知識を持つことは、利用できる知識（情報）を手に入れ、保持することである。知ることは機能的であり、生産的な思考の過程における一つの方法としてのみ役立つ。」（65頁）

（4）労働における様式の違い——マルクスの展開

では、「ある様式」における労働（仕事）とはどういう形をとるのだろうか。その点で、『自由からの逃走』においては、「ひとは自我の自発的な実現において、かれ自身を新しく外界に——人間、自然、自分自身に——結びつける…（略）…。仕事もいま一つの構成要素である。…（略）…創造的行為において人間が自然と一つになるような、創造としての仕事である。」（287頁）と述べるに止まっている。

この点では、マルクスが展開した労働についての規定〔「ジェームズ・ミル著『政治経済学要綱』（J・T・パリゾ訳、パリ、1823年）からの抜粋」——『マルクスエンゲルス全集』40巻、大月書店、1975年刊）が、参考になるだろう。

マルクスはそのなかで、「私的所有の前提のもとでは」、すなわち資本（家）が、労働者を、自分の欲望を実現するための手段として位置づける関係の中では、「私の個性はとことんまで外在化されているために、この活動（労働を指す——引用者注）は私にとって憎らしいもの、苦悩である。むしろそれは活動の仮象に過ぎず、したがってまた、強制された活動に過ぎない。しかも内的・必然的な必要によってではなく、もっぱら外的・偶然的な必要によって私に課

せられているのである。」と述べる。それに対して、その関係を克服したなかでは、「私の労働は自由な生命の発現となり、それゆえ生命の享受」となり、「労働において私の個人的な生命が肯定されるのだから、私の個性の独自性が肯定されることになるだろう。だから労働は、真の、活動的な所有となるだろう」(382-383頁、傍点原文)と述べる。そしてそのような労働のありようについて、以下のように記述する。

「われわれが人間として生産したと仮定しよう。その時には、われわれはいずれも、自分の生産において自分自身と相手とを、二重に肯定したことであろう。私は、一、私の生産において私の個性を、その独自性を、対象化したことであろう。したがって私は、活動の最中には、個人的な生命発現を楽しみ、そしてまた、対象物をながめては、私の人格性を対照的な、感性的に直感できるそれゆえまったく明々白々な力として味わうことであろう。二、私の生産物をきみが享受したり使ったりするとき、私は直接に、次のような喜びを味わうことであろう。すなわち、私は労働することによって人間的な欲望を充足し、したがって人間的な本質を対象化し、それゆえに、他の人間的な本質の欲望にそれに適合した対象物を供給した、と意識する喜びを、三、君にとって私は、君と類とをとりもつ仲介者の役割を果たしており、したがって、君自身が私を、君自身の本質の補完物、君自身の不可欠の一部分として知りかつ感じてくれており、したがって、君の思考のなかでも、愛のなかでも、私を確証していることを知っているという喜びを、四、私は私の個人的な生命発現のなかで、直接に君の生命発現をつくりだし、したがって、私の個人的な活動のなかで直接に私の真の本質を、私の人間的な本質を、私の共同的本質を、確証し実現したという喜びを、こうした喜びを私は直接に味わうことであろう。」(『マルクスエンゲルス全集』40巻、382-383頁)

もちろん、マルクスにとっては、この哲学的な規定は、その後の資本論研究によって、経済学的な根拠を持つ、人間存在をめぐる本質的規定として、より具体的に捉えられることになるものである。

しかし個性のこのような視角からの分析は、ただ単に資本主義の克服というような人類史の長期的な視野からみた哲学的で、抽象的な理念上の問題に止まるものではない。いままでも一定の検討を試みてきたように、労働がどういう意味で個性の実現とかかわるのかは、まさに今日の重大かつ深刻な問題であり、かつ心理学的にもひとびとの日常的な関心となっている。なぜに個性が、これほどに求められるのかは、人をその所有物によってかくも激しく格差づける現代の人間評価の仕組みによって自分の存在の意味を不安に曝され、たびたびの深刻な自己否定に陥れられる現代人の、人間存在の本質から発せられる切実な自己発見の切望が、「個性」実現願望としてさまざまな形で、噴出しているからではないのか。人間の「共同的本質」を実現すべき労働を介した関係が、資本の価値増殖欲求の実現という目的の下での人と人との資本主義的關係に置き換えられ、その下で、人間が、資本の手段化され、他者の目的の手段として扱われ、自己の労働とその生産物が自分から切り離され、人と人とがまさにフロムのいう「生産的能動性」において他者とつながることが出来なくされている現実、今日の個性喪失を招来せしめている根源として、批判的に解明されなければならない。そのようなシステムの下で、各自が所有している様々な能力が、自分の価値を示す物として機能する「持つ様式」に囚われ、その様式のもとで差異としての個性の探求に精力を費やし、何を所有するかに奔走し、人がどう生きるか、また他者とどうつながるかという「ある様式」の探求を放棄させられている現実こそ、個性論の本格的解明を求める現実的根拠であろう。

（三）フロムの二つの個性規定の統合的把握

以上みてきたように、フロムの個性規定は、『自由からの逃走』において展開された「自発的能動性」というその心理学的、社会心理学的な、あるいは人格の性格的な特質に焦点を当てた分析と、『生きるということ』で展開された「持つ様式」と「ある様式」という人間存在の本質分析に即して展開された分析の二つの側面からなされているということが出来る。そして先にも見たように、フロム自身が、『自由からの逃走』の中で＜自発的能動性＞という用語を使用し、それ以降は＜生産的能動性＞という用語を使用した」と自ら記してい

382 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

ることからも、第一の側面から第二の側面への展開は、フロムの個性規定の深化であり、包括的な把握への発展であると捉えることができるだろう。

個性規定をめぐるのは、様々な議論が存在している。例えば、『教育学年報』は、その第四巻で、『個性という幻想』を特集した。確かに日本の近代教育史を「個性」という価値の探求の名の下における「個性喪失」、あるいは「個性剥奪」の歩み、あるいはより正確に言えば、個性探求の試行錯誤とその「失敗」や「挫折」の歩みであったと把握することができるかも知れない。しかしそれは個性そのものが「幻想」であるということを示すものではない。そのことを深く検討することなく、「個であること」のかけがえのなさ、個性性であることの価値性とは、もともと重なり合わない（小浜逸郎「個性という強迫」『教育学年報4、個性という幻想』森田尚人他編、世織書房、1995年、5頁）と性急に結論づけることは、個性研究の本来のありようではないだろう。（注）

（注）小浜氏は、「個であること」のかけがえのなさ、個性性であることの価値性とは、もともと重なり合わない。個性性であるとは、凡庸さのなかにあってひときわ目立つということであるから、それを人間としてより価値の高いことであると認め、誰もが実現すべき目標と考えるなら、その指向性自体は、凡庸であることの否定を含んでいる。／他方、個であること「のかけがえのなさとは、すべての人間は一個の存在として等しく尊重されるという意味であり、人間の値打ちはそのかぎりでは、凡庸であるか個性性であるかにかかわらないということである。『個であること』の尊重とは、別にその存在が際立った個性を示さなくても、一人の人間であるかぎり、他の『個性ある』存在と等価なたちでその存在理由を認めましょうということである。」（5－6頁）と述べる。ということは小浜氏は、個性性という概念を、差異としての個性概念に立って論述しているということになる。そして氏は、「教育における平等主義的必要」が「個性の尊重」を押し出したと、次のように述べる。

「諸君は『高校生』や『大学生』の資格において、みんな平等である。

しかし、資格においてみんな平等であるということは、けっしてその人

間的特質において『みんな同じ』ということではない。しかしまたその差異は、学力のように、序列的な差異（優劣関係）として明示されてはならない。ほら、人はそれぞれ多様な『個性』をもつではないか。その部分を最大限に認め、発掘し、育て、際立たせることにしようではないか。……」（19頁）

したがって小浜氏にいわせれば、個性尊重、個性実現という教育の努力は、「平等でないものに平等の偽装をまといせようとして、格別の苦心を払っている。そしてまた一方では、画一性と批判されることに対する過剰な配慮も欠かさない」となる。したがって、そもそも「教育が個性を育てることができるなど考えるのは、分不相応な思い上がり」（21頁）であり、せいぜい「個性的な教育」が可能であるに過ぎないのだと主張する。もちろん小浜氏のアイロニーが読み取れないわけではない。現実の教育現場が確かに子どもを差別しつつ（させられつつ）「でも子どもは平等だ、どの子もかけがえのない個性をもっている（はずだ）」という形で、自分たち（学校）は人間の「平等」を主張しているというために「個性」というものを持ち出している面があることは、小浜氏の批判にあるとおりである。しかし小浜氏の論理に決定的に欠けているのは、個性をほとんど「差異としての個性」論に立って扱っていることである。だから教育において個性を採求するという本格的に論じるべき課題は、むしろ「幻想」として否定の対象になってしまうのである。

確かに、日本の戦後教育政策における中心的理念のひとつとしての「個性化」が、「多様化」のもとでの「画一化」へと展開していくものであったこと、いま盛んに強調されている習熟度別学習が、学習の「個性化」の方法として強調、推奨されているにもかかわらず、学習の到達度ごとへの学習の分断と孤独化、学習の共同性の剥奪の方法として機能していること、さらにいえば、就職をめぐる個性競争が、まさにいままでの私の「個性論ノート」でみてきたような「持つ様式」における所有物の競争的差異化として、したがって自分の所有物の自分との分断として機能していることからしても、それは「個性」追求の困難さ、あるいは私のいう「個性論の逆説」（「個性論ノート（5）」）的事態と

384 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

把握するに値する状況ではあろう。しかしそれは「個性」が幻想であるのではなく、その「個性幻想」に帰結せざるを得ないたぐいの個性探求を主導する個性規定（個性概念）それ自身の問題性・矛盾としてこそ解明され、批判的に分析されなければならないと考えるのである。この検討は次回の課題として、「個性論ノート（6）」を終わる。（2009-12-30）

ABSTRACT

Study Notes on the Theory of Individuality 6

Hiroshi SANUKI

Erich Fromm raised one important way of examining individuality in '*Escape from Freedom*'.

According to Fromm, a person subordinates himself to the strong authority, and gives up freedom to avoid loneliness. We can understand that process as a process of the individuality renunciation. If so, it can be said that the realization of the individuality is to live independently along one's will. "Live independently" means to live for his own purpose, to connected with others independently and to realize the meaning of one's life.

Fromm raised one more way of appreciating individuality, too. That is the thoughtway of "the style of having" and "the style of being". The former insists on the individuality by the difference in the possetions. The latter tries to realize individuality by making oneself the independent creative subject.

In this study I examine the relation of two way of this Fromm's individuality analysis.